

半田半兵衛一番鎧を合せ、深手負ひけり。則ち軍功御吟味の上、半兵衛には千石御加増被下、かち母衣十五人與力に付け給ふ。とあり。又元祿十四年に、舊藩五世綱紀卿取立て給ひし利家卿以來奉仕足輕由緒書に、栗野甚内と云ふ者、利家卿御代母衣歩行にて御奉公仕り、百廿石被下置。と見え、又林久助と云ふ者、利家卿御代母衣徒にて被召出、五十石被下置。とあり。又寛文十一年堀口彌三郎由緒帳に、祖父堀口伊右衛門生國美濃にて、金森法印に仕ふる處、利家卿渡邊治部と一所に被召寄、四百石被下、母衣被仰付。とあり。但し是は使番なる母衣士ならんか。又宮崎氏家譜に、二代宮崎藏人重元、慶長五年加州大聖寺城攻の時鎗奉行相勤め、歸陣後母衣歩行十人足輕二十人被指預。母衣歩行者一統采地三百石賜之。と見え、傳伽雜談に、敬基覺書にて、其の頭三人今井左太夫・中村彌五左衛門・宮崎藏人也。左太夫組十人は、

四拾七石 鈴木彌次内
四拾六石 田邊喜兵衛

四拾三石五斗 田邊新丞
四拾二石五斗 近藤勘兵衛
四拾石 矢部辨之助
三拾七石五斗 西野權右衛門
三拾七石五斗 清水半右衛門
三拾六石 太田清左衛門
四拾石 高橋助兵衛

中村彌五左衛門組・宮崎藏人組にも十人宛有之由。とあり。按ずるに、諸頭系譜に、宮田内藏允御徒母衣の者御預け、寛永元年死去。二代内藏允御使番、足輕頭、母衣御歩御預け、御馬廻頭、萬治元年死于江戸。とありて、寛永四年士帳に如左載せたり。

未相極不申衆
一、四拾七石 御代官母衣衆 鈴木彌次内
一、四拾六石 同 母衣衆 田邊才兵衛
一、三拾六石 同 母衣衆 寺田清左衛門
一、三拾七石五斗 同 母衣衆 清水半右衛門
一、四拾石 同 母衣衆 矢部才助

一、四拾石 同 母衣衆 高橋助兵衛
一、四拾三石五斗 同 母衣衆 田邊新藏
一、三拾七石五斗 同 母衣衆 西野權右衛門

御歩母衣衆

山田市内 馬場理右衛門 舟木四郎左衛門
林 喜兵衛 田邊新助 山田市兵衛
小川七左衛門 野木江五兵衛 林 次郎兵衛
古市六左衛門 三田八兵衛 五十嵐少左衛門
西嶋左助 八木宗左衛門 小嶋九郎兵衛
吉田宗兵衛 安井半左衛門 野木江覺左衛門
稻葉加兵衛 大場九左衛門 古市加右衛門
立川伊左衛門 鈴木覺兵衛 三輪久之佑
青木久左衛門 馬場九兵衛 九里加兵衛
柴垣八左衛門 竹下次郎左衛門 服部五右衛門
松村十助 田邊傳右衛門 太田理兵衛
小原彌左衛門 猪俣仁左衛門 服部又兵衛
淺野權左衛門

以上 人數三拾七人

知行合 千二百八拾七石

傳伽雜談にも、寛永四年之頃は人高三拾七人、知行高千二百八拾七石配當。此の頃は御使番の手に屬し、諸手へ御使を勤めし由、古人之物語也。とあり。按ずるに、母衣歩行は、萬治二年十一月居屋敷歩數定書に見わたる後は、其の名目所見なし。國事昌披問答に、萬治二年新規に歩士を召抱えられ、二拾五石宛賜之。是迄の歩士は定番歩と成る。是より先、母衣御歩と云ひて有之。とあり。されば萬治二年に母衣歩は止められし也。混見摘寫に、當家にて母衣衆は横目白、小々將赤、使番黄赤段々。已前は足輕の母衣を進め申すよし。是は常の母衣より大きなり。いきほひの爲め也と云ふ。今母衣町は右の足輕在之所といひ傳ふ。といへり。今按ずるに、足輕に母衣足輕といふものありしかど、母衣町に居たりといふは非なり。傳伽雜談に、母衣足輕と云ふ者百人在之、知行三千石被下置。今の五十人町其の組地なるよし、古人の咄也。とあり。

○母衣武者事略

文安元年の下學集に云ふ。總作母衣。言孩兒在母胎時。頭